



# WORK WHEELS JACK 3rd

●2023年11月19日 /  
兵庫県・三木市立かじやの里メッセみき駐車場

TEXT & PHOTO : TAKAYUKI KIMURA/木村隆之

## 3回目の開催となった ワークホイール装着車の祭典



展示スペースには、ワーク製ホイールを履いてカスタムされた、スポーツモデルからセダン、ミニバン、軽カー、SUVまで、あらゆるジャンルのクルマが並んでいた。ハコスカオーナーの矢野敢太さんがアワードを受賞。

2023年11月19日に、兵庫県三木市立かじやの里メッセみき駐車場で行われた、「ワーク・ホイール・ジャック3rd」。ワーク製ホイールを履いている事が最大のポイントで、ワークホイールファンの車両が勢揃いするイベントで、今回が3回目。主催はグッドガインインターナショナル。

ワーク製ホイールを装着しているすべてのカテゴリのユーザー車がエントリーすることが可能で、カーショップで購入できるホイールを履いたものから、極太リム、オリジナルカラーオーダーなど、スペシャルオーダーのホイールを装着した車両などが、会場に集まっているのが特徴だ。参加している車両は、国産スポーツカーからクーペ、セダン、ワゴン、ミニバン、SUV、R



V、軽自動車、旧車、輸入車など、ほぼすべてのジャンルから、210台以上が参加していた。

イベントは、車両の展示だけではなく、展示スペースの駐車場に併設された館内展示場を利用して、ステイジイベントが進行された。見事アワードに選出されたクルマには、このイベントでしか手に入らない、ホイールをモチーフとした円形の特製トロフィーが授与された。このトロフィーを獲得するために、愛車をアップグレードするオーナーも多いとのこと。

自分好みのオリジナルのサイズ設定で、イメージ通りに履きたいというカスタムユーザーに、ワークのホイールがとて好まれていることがよく分かるイベントだった。

## 95年式 ユーノスロードスター

ひかる、ひさん

エンジンをフルオーバーホールし、AE101用の4スロを装着し、LINKで制御。ホイールはエクイップ01の15インチを装着。326パワーのチャクリキダンバーなどでローダウンしている。



## 91年式 スーブラ 2.0ツインターボ

だあくんさん

エアロを装着し、ブルーパールでオールペイントし、インテリアもコーディネート。足まわりはエアフォースのエアサス組み。ホイールはエモーションRS11の17インチを装着。



## 23年式 ZR-V

mugisaさん (岐阜県)

ノルディックフォレストパールのZR-V。足まわりにはRS-R製の車高調を組み込んで、5cmほどローダウン。ホイールは、以前乗っていたCR-Vに履かせていて、お気に入りだったグノースCVDの21インチを装着。



## 86年式 スプリンタートレノGT APEX ブラックリミテッド

石本崇人さん (滋賀県)

400台限定で販売されたブラックリミテッド。ホイールはマスターCR01のカラーオーダーで、ディスクとリムをブラック、ピアスボルトはゴールドにしてボディカラーとコーディネート。



## 02年式 RX-7 スピリットR

中尾 勝さん (滋賀県)

10年かけて最終モデルのスピリットR入手。ナイトスポーツのインタークーラーをVマウントし、パワーFCなどでチューニング。ホイールはマスターL1 3ピースの18インチを装着。タイヤは215/35R18。



ハーウェイのフロントバンパー、サイドステップ、RSマッハのリアバンパーを組み合わせた。ホイールはエクイップ03で、フロント14インチ、リア15インチの異サイズ履き。内装は自作だ。

## 91年式 ヒート

あむあむさん (佐賀県)



## 70年式 スカイライン 2000 GT

ヤノさん (愛媛県)



1年かけてレストアしたハコスカに、エクイップ03を装着した、王道のシャコタン旧車スタイル。エンジンはまだノーマルらしく、これからチューニングしていきたいとのこと。

## 06年式 マークX

じゅりべげさん



純正オプションのヴェルティガバンパーを短縮し、グリルが装着できるように加工したぞうだ。ホイールはエクイップE05の19インチで、フロント9J、リア10J。フルアーム&車高調でシャコタン仕様!



## 90年式 セドリック プロアム

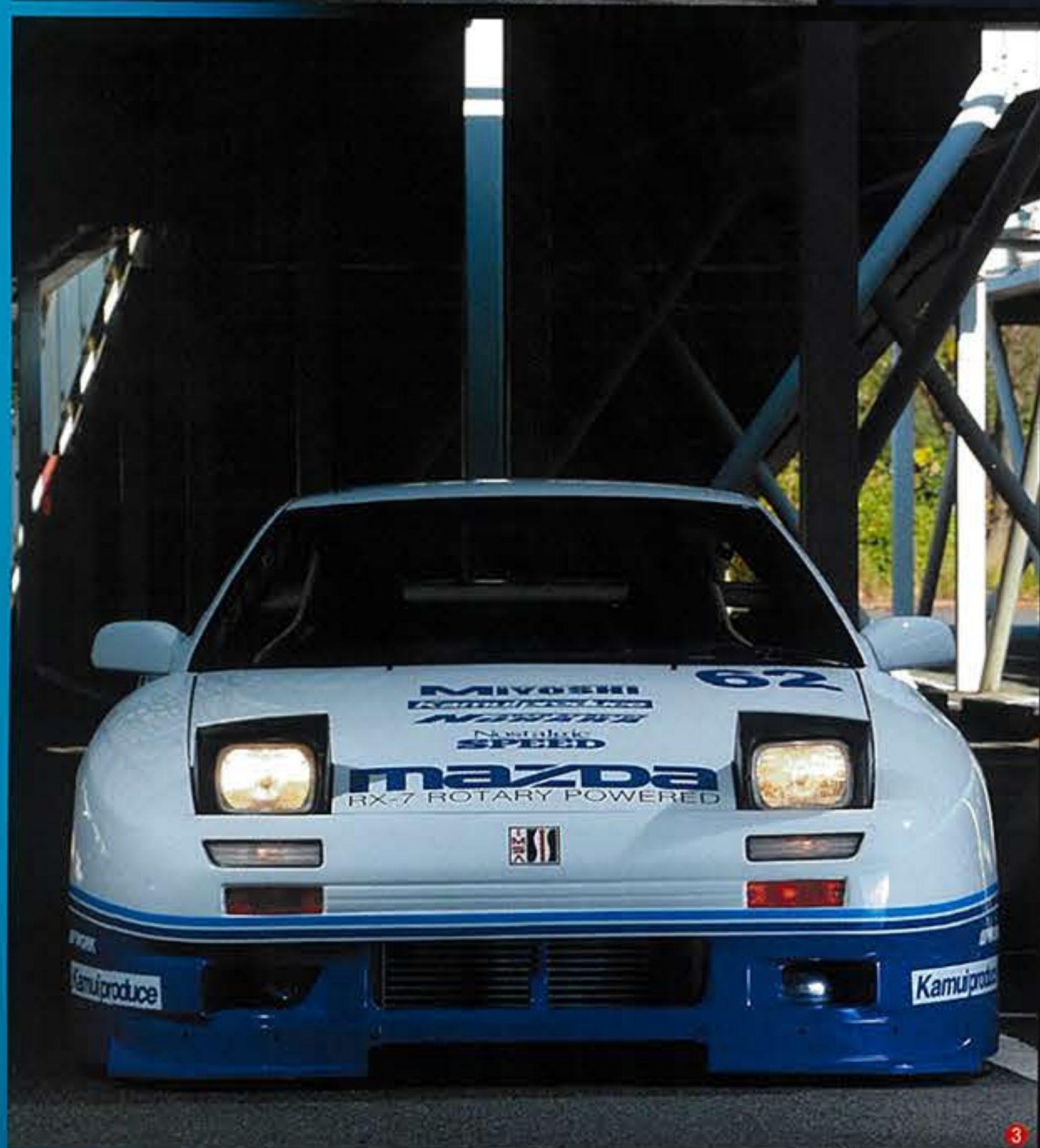
yumaさん (奈良県)

2年前に入手したY31セドリックは、シーマ用をベースにワンオフしたフロントリップ、マッドガードを装着。ホイールはシーカーSXの16インチ。足まわりにはJICの車高調を組み込んでローダウン。

# 最新モデルにも負けない圧巻のスタイル! いまだ色あせないロータリーレーシング



①② 埼玉のERC製ボディキットより、全幅は約200mm拡大。丸みのあるプリスターフェンダーが迫力のあるスタイリングを構築。現行レースカーと比べると空力デバイスも控えめで、時代を感じさせる。



③ 車両は後期型だが、フロントバンパーに合わせて前期仕様になっている。ボンネットはガレージカゴコニ製。  
④ ややトランクより後ろにマウントされたスタイリッシュなウイングはKSPエンジニアリングのドラッグレース用。  
⑤ JSS仕様のフェンダーには給油口がないため、プリスターフェンダーに合わせて内部を成形。最初からこうだったかと思えるようなスマートな仕上げ。  
⑥ JSS仕様のエアロはエンジンがNAのため、本来インタークーラーの装着を前提としていない。そのため造形を一部加工して対応。

ロータリーエンジン車を軸としたマツダ車のトータルコーディネートを得意とする岡山県の三好自動車。ここ数年はスポーツを意識したマシンメイクで全国のカーショーに参戦。2023年もリバイブエアーの最新エアロを組み合わせた独自のFD3S・RX・7スーパーシルエットを3台製作。各イベントで来場者の度肝を抜いたのは記憶に新しい。しかも、全車オーナーカーだというから恐れ入る。

今や全国トップクラスのカスタマイズショップに名を連ねるが、「オーナー」とも何にも似ていない、世界に1台のマシンを作る」という変わらぬコンセプトで製作した最新のメイキングカーが、このFC3S・RX-7だ。

ブルーとホワイトのカラリングは、1990年代にアメリカのIMSA・GTシリーズ・GTOクラスで活躍した4ロータリーマシンがモチーフ。往年のマツダファンには懐かしい。

ただし、IMSA用ボディキットはアフターマーケットには存在しない。けれど、イメージは近づけた。そこでひらめいたのが、国内のモータースポーツシーンでFC3Sがワイドボディキットを装着していたJSS（ジャパン・スーパー・セダン）仕様。当時ものが残っていればカテゴリーは違ってもレースを戦った本物だろうと、JSS用エアロを製造していたメーカー&ショップに打診。唯一当時の型を残していた「ERC」にたどり着いた。

こうしてJSSボディにIMSAカラーをミックスしたありそうでなかったスタイルが誕生することになった。「オーナーの藤原義春さんは、息子さんも含めて、これまで複数台のカスタマイズカーの製作をご依頼いただいて

これまでロータリーエンジン車をベースとした数多くのスーパーカスタムを製作し、幾多のイベントでグランプリを獲得してきた岡山県の三好自動車。新たに手掛けるFC3S・RX-7は、往年のレースシーンで活躍してきたマシンのミクスチャー仕様。兄・祐也さんのひらめきと弟・敏昭さんの緻密なセットアップで、今回もスタイルに走りも際立つ1台に仕上がった。

## DAYTONA × JSS FC3S SAVANNA RX-7

ハチマルスピード



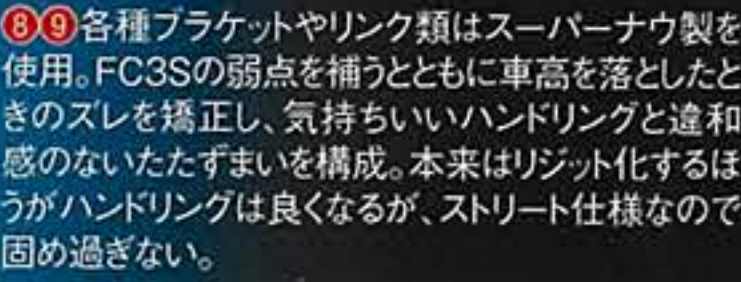
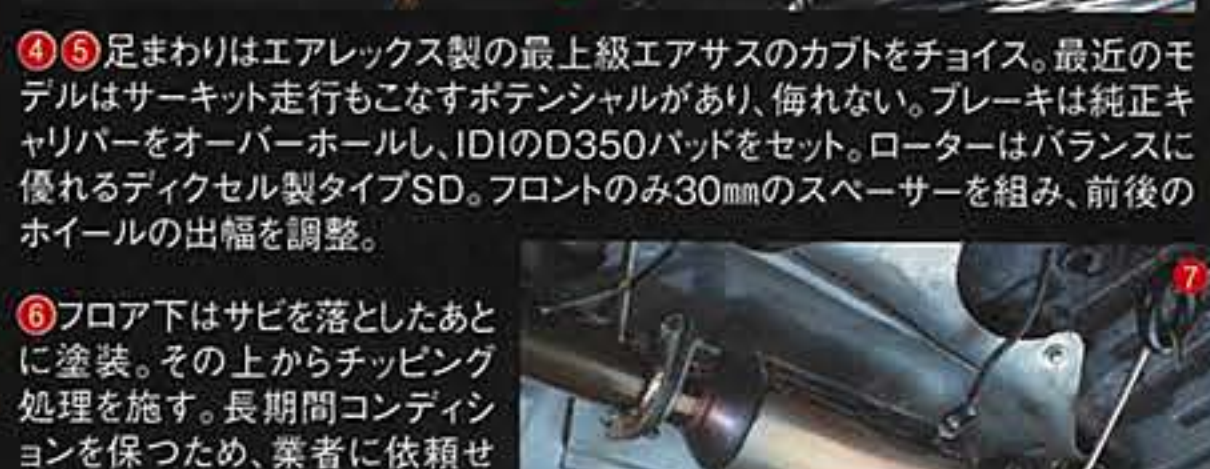
TEXT : SHINICHI YAMAZAKI/山崎真一  
PHOTO : RYOTA-RAW SHIMIZU (FOX BOOKS) / 清水良太郎 (フォックス ブックス)  
COOPERATION : MIYOSHI / 三好自動車 TEL 086-462-0708 <https://miyoshi344.com/>



エンジンルームはマツダのファストバックグレーに塗装。ボディカラーに対して変更するのはカスタム業界では定番的手法。各部も整備済みで、ブルーとオレンジの差し色を添えるなどセンスが良い!



- ① タワーバーは当時感を演出するために祐也さんのコレクションであるマツダスピード製初期型タワーバーを導入。カラーと絶妙なヤレ感がベストマッチ。
- ② 純正部品はひとつひとつ磨きをかけて刷新。ホースバンド類はGReddyロゴの入ったGPP製の最新作。人気が高く入手困難な逸品。
- ③ ラジエーターはKOYORAD製。ファンシールドは最新のカーボンラッピングでフィニッシュ。本物と見間違える質感の高さに驚くはず。



- ④⑤ 足まわりはエアレックス製の最上級エアサスのカートをチョイス。最近のモデルはサーキット走行もこなすポテンシャルがあり、侮れない。ブレーキは純正キャリパーをオーバーホールし、IDIのD350パッドをセット。ローターはバランスに優れたディクセル製タイプSD。フロントのみ30mmのスペーサーを組み、前後のホイールの出幅を調整。
- ⑥ フロア下はサビを落としあとに塗装。その上からチッピング処理を施す。長期間コンディションを保つため、業者に依頼せず、祐也さん自身が徹底的に処置。マフラーはRE両窓のドルフィン。
- ⑦ キャタライザーはSARD製。ミッションはオーバーホール済みで、ORCライトクラッチを装着。



**SPECIFICATIONS 91年式 サバンナRX-7(FC3S)**

- ボディ: ERC製JSSワイドボディキット、KSPエンジンアライメント製リアスポイラー、NAOロードスター用サイドウィンカー、オールペイントSIMSAG2号車ラッピング
- エンジン: 13B型ローターターボ(654ccx2ローター、1308cc)
- 駆動装置: ラストエアインクセスエアクリナー、プロフェックブーストコントローラー、極本改製フロントパイプ、サード製スポーツキャタライザー、RE両窓製ステンレスマフラー(メインφ70/テールφ101mm)
- 冷却系: コーヨーラド製2層ラジエーター、トラスト製インタークーラー
- 燃料系: サード製燃料ポンプ
- 駆動系: ORC製ライトクラッチ、軽量フライホイール
- サスペンション: エアレックス製カブトエアサスキット、スーパーナウ製キャンバーコントロールサプリング/スタビリンクセット/キャンバーコントロールメインリンク/ラテラルコントロール、スタビライザーブラケット
- ブレーキ: IDI D350ブレーキパッド、ディクセル製ブレーキローター(タイプSD)
- タイヤ: プリチストン・ポテンザRE71RS (F)225/50R16 (R)245/50R16
- ホイール: ワーク マイスター-CR01 (F)16x9J-16 (R)16x10.5J-12
- インテリア: MOMOSトラストラボステアリング、レカロ製RCSフルバケットシート、ウイングタケオ製メーターベゼル、日本精機Defi製サブメーター(水温・油温・油圧)、トラストラ製シフトノブ、カロ製フロアマット/ラグジマット、カロツツエア製オーディオ

**DAYTONA JSS**  
FC3S SAVANNA RX-7

1/3 P / SPEED

エンジンはブーストアップ仕様の250ps  
足まわりを煮詰めて操って楽しいマシンに!



- ① ホイールはワークのマイスター-CR01。フロントは16x9J-16、キャリパー外周に対してディスクがハツハツに収まっているのがグッド。
- ② リアは16x10.5J-12。ディスクはポリッシュの手磨きで、リムはバフポリッシュ仕上げ。ピラスポルトもヒートグラデーションのチタン仕様だ。

います。今回も「時間はかかってもいいから、好きなようにやってええよ」と製作者冥利に尽きるオーダーで、約2年前に製作はスタートしました」とカスタム担当の三好祐也さん。

まずはどのようなスタイルに仕立てるか、祐也さんの頭の中でアイデア出し。車体が限定車のアンフィニッシュであったことから、ノーマルのフルリフレッシュという案から始まり、一時は「RE雨宮風林火山号」レプリカに決まり、パーツもそろえたのだが、別のオーナーから同仕様の依頼があったことから方針転換している。最終的に「ボディキットがあったら」という前提で、JSS仕様が決まった。

カラーリングも二転、三転。当時レースを走っていたパールのレプリカから始まり、次にステッカー類はそのままだにマツダ3のファストバックグレイにペイントしてオリジナル性を出す案が浮上。準備を進めていたが、昨年製作したIMS仕様のFD3Sを見て、あまり口を出さないオーナーが「このデザインが一番いい」と発した鶴の一声で方向性が確定した。

カムイプロデュースと野原自動車板金塗装が担当するボディワークは、まずはドンガラまでばらして全体をリフレッシュ。車体のコンディションは悪くなかったが、草むらの上で保管されていたので、床下の表面はボロボロ。まずはフロア全体の塗装を剥離してサビを除去し、その上に塗装を施す。ただし、ボディを保護するためのチッピング処理は三好自動車で施工している。カラーリングはホワイトに全塗装した上で、ブルーの部分、ロゴ関係はすべてラッピング仕上げ。ちなみにERCのボディキットの型は現役当時のものを



①ノーマル然としながらもボディカラーに合わせた色を加えることで統一感を出す。ステアリングはGReddyとMOMOがコラボした限定100本のコラボ品。ステアリング奥に見えるのはGReddyのブーストコントローラーのプロフェック。②助手席グローブボックスのヘアラインパネルは、ウイングタケオ製。左から油圧、油温、水温。隣に見えるのはエアサスの車高調用操作コマンダー。③シフトノブもGReddy製で、フロアマットはKARO製だ。

## 絶妙なカラーコードで映えるインテリア ロールバー装着でレーシーな雰囲気も演出



④フルバケットシートながらストリート&ファッション性を意識した人気のRECARO製RCSを運転席、助手席にセット。ただし4点式シートベルトの装着は不可。  
⑤ラゲージルームにあるボックスは、エアレックス製エアサスのメインユニット。サイズに合わせてオーダーしたかのようにキレイに収まる。  
⑥レースカーを想起させるために、斜行ロールバーも装着。実用性をスポイルさせないため、リアのみの設定。



**DAYTONA x JSS**  
FC3S SAVANNA RX-7

OWNER  
藤原義春さん(広島県)

本誌028号で紹介したFC3Cカブリオレを始め、三好自動車で作ったカスタマイズRX-7を複数台所有する藤原義春さん(写真左)。その作業に全幅の信頼を置いている。息子さんもモディファイされたFD3Sを所有し、一緒に高速ツーリングに出かけることもあるそう。個性派マシンが連なって走る姿は圧巻だろう。一度そのコレクションを見たいものだ。



**三好自動車**  
岡山県倉敷市下庄947-6 TEL 086-462-0708 <https://miyoshi344.com>

### オンリーワンがかなう実力派ショップ

長男・三好祐也さん(写真左)のひらめきとセンス、次男・敏昭さんの確実なセットアップを融合させた「見て、乗って楽しい」オーダーメイドマシンを次々と生み出す三好自動車。カスタマイズを通じてクルマとオーナーが同時進行で成長していけるカーライフを提供していきたいという考えに賛同するファンが足しげく通う。奇抜なマシンメイクではなく、トータルバランスのよさで勝負する岡山の実力派ショップだ。思い描いた理想をかなえてくれるはずだ。

使っているが、30数年前の設計とは思えないほど精度が高く、フィッティングも最低限の修正で済んだそうだ。全幅約1900mmまで拡大されたマシブなボディは、現行のリアルスポーツカーと並べても勝るとも劣らない迫力あるスタイリングを実現。また、ベイス車のイメージを大きく損なわないデザインにも好感が持てる。リアウイングは車検も考慮し、ローマウントデザインのKSPエンジニアリング製をチョイス。オリジナルな演出を添えるのも三好自動車流だ。「こだわりは、ストリートカーであり続けること。今回は当時のレースで使われていたエアロを装着していますが、公道で使うことを考え、あえてタイヤの張り出しを抑えています。エアサスを使うのも理想のスタイリングを実現しつつ、実用性を損なわないのが理由。

また「外装だけか」と言われたくないので、ストリートからサーキット走行までテストした上で納車。エアサスでも乗って楽しいですよ」と各種セットアップを受け持つ敏昭さん。内装もボディカラーに合わせて、バケットシートやフロアマット、ステアリングやシフトノブに至るまで白と青を添えてコーディネート。また、ヘアライン処理されたシルバースターパネルが室内にアクセントを、リアの7点式のクロスロールバーがレースカーの雰囲気を盛り上げるなど、細部まで作り込みに抜かりがない。「依頼されたからには期待以上に込めたい。予算はあるんじゃないけど、いつも入れ込み過ぎちゃう」と笑う祐也さん。今後は全国のショー&イベントに展示予定なので、三好流の最新スーパーカスタムをぜひ生体験してほしい!